祈り

神奈川区支部　永井　由美子（子）
戦没者　永井　敬司
戦没地　フィリピン

平成十八年八月十六日、母は八十七才の生涯を閉じました。それはまさに戦後と共に生きてきた人そのものの人生でした。

私が十才の頃、母と共に京都へ行った事がありました。私にとっては唯の旅行でしたが、母にとっては一つの区切りをつける大切な旅でした。

父はルソン島で、多くの方々がそうだった様に終戦時に隊にいなかったとの理由だけで、遺骨も身近に確認者もいない「戦死」でした。

二十七才で出征し結婚生活も一年余り、乳飲み子と共に残された母にとって、その死はとうてい受け入れられるものではありませんでした。

ジャングルのどこかで彷っているのではないか、現地の人に助けられて何時かは帰ってくるのではないか……喉が渇いているだろう、お腹をすかせているだろう、と多量の水と陰膳を供え父の無事帰国を祈る日々が十年続きました。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

十才になった私は、母にとって唯一頼る事の出来る存在だったのでしょう。「由美ちゃんお父さんはやっぱり亡くなったのね、きちんと供養してあげましょう。その前にお母さんの気持ちを整理する為に一緒に旅行に行ってね。」

その時の母の気持ちがどれ程の決心だったのか、当時の私に分っていたのかどうか定かではありませんが、その時の言葉と旅の思い出は今でも鮮明に覚えています。

それからの母の人生は、父への祈りそのものでした。

戦後間もなく教職に就き、小学校の教員として三十数年無事勤め上げ、私の夫も養子縁組をしてくれ、孫も男の子二人、ひ孫も男女一人ずつ生まれ、人様から見れば苦労の甲斐があった幸せな半生だったかも知れません。唯私には、本当に母は幸せだったのだろうかという思いが、いつも心の片隅から離れません。

毎朝毎晩父の為に読経し、片時も父の事を忘れた事のなかった心の中に、六十一年間共に暮らした私にも量る事の出来ない深い悲しみを、終生抱えて生きて来たのだと思います。

母に限らず人は多くの悲しみ、苦労を背負って生きているのですが、母が亡くなって母が通って来た道を歩きながら、強くその悲しみを思うようになりました。

常に私の幸せを祈ってくれていた母でした。

今、私は毎朝仏壇に手を合わせ、「お父さんと逢えましたか、幸せに過ごしていますか」と母の成仏を祈る日々です。

©2011_財団法人神奈川県遺族会